第１章　複式簿記の基礎

第１節　簿記の役割（p.8）

簿記とは　企業の　取引　を　一定のルール　にしたがって　帳簿　　に記録し、それにもとづいて　報告書　　を作成するための手続きのことである。

簿記の役割

報告書や各種の帳簿を作ることで､企業をとりまく関係者は次のようなことができる。

・株主・債権者　　報告書を見て、企業に資金を提供し続けるかどうかを　判断　する。

・経営者　　事業の状況を把握し、よりよい経営を行うための　意思決定　を行うとともに、　財産管理　を行うことができる。

第２節　簿記の用語（p.9）

１　借方と貸方（p.9）

簿記では左側を　借方　　、右側を　貸方　　という。

借方	か　か り　し か　か	貸方
	た　た	

２　会計期間（p.9）

企業では　１　年を一区切りにして計算を行う。この一区切りを　会計期間　（または事業年度）という。

会計期間の初めを　期首　　、終わりを　期末　　という。

第３節　資産・負債・資本と貸借対照表（p.10）

１　資　産（p.10）

資産とは　企業が所有している　財貨　　および　債権　　のことで、企業にとっては　財産　　としての性格を持つものである。

資産の種類

【財　貨】　（　現　金　）、預金、（　商　品　）、（　建　物　）、（　車両運搬具　）、（　備　品　）、（　土　地　）など

【債　権】　（　貸付金　）、（　売掛金　）など

貸付金とは　現金を貸し付けた　ときに生じる　債権　のことである。

売掛金とは　商品を掛けで売った　ときに生じる　債権　のことである。

※債権とは、あとで現金・商品・サービスを受け取る権利のことである。

２　負　債（p.10）

負債とは　企業が所有している　債務　　のことで、企業にとっては　マイナスの財産　としての性格を持つものである。

負債の種類　（　買掛金　）、（　借入金　）など

買掛金とは　商品を掛けで買ったときに生じる債務　　のことである。

借入金とは　現金を借り入れたときに生じる債務　　のことである。

※債務とは、あとで現金・商品・サービスを提供する義務のことである。

３　純資産（資本）（p.11）

純資産とは　資　産　から　負　債　を差し引いた差額のことで、企業にとっては、正味の財産　　である。

純資産の種類　（　資本金　）、（　繰越利益剰余金　）など

資本金とは　株主が会社に出資した額

繰越利益剰余金とは　会社がもうけた利益の蓄積額

資産　－　負債　＝　純資産　←　純資産 等式

財 産　　マイナスの財産　　正味の財産

4　貸借対照表（B/S）（p.11）

資産　－　負債　＝　純資産　←　資本等式

↓資産＝に変形する

資産　＝　負債　＋　純資産　←　貸借対照表等式

貸借対照表　・貸借対照表等式にもとづいて　資産　・　負債　・　純資産　を　一覧表　にまとめたものである。

・　一定時点　において、資産・負債・純資産がどのような状態になっているか（これを　財政状態　という）を示すものである。

・貸借対照表の基本形

貸借対照表

□□商事　〇年〇月〇日　（単位：円）

（　資産　）	（　負債　）
	（　純資産　）

例題１

貸借対照表

実教商事（株）　01　年　4　月　1　日　（単位：万円）

現　金	150	買掛金	90
商　品	120	借入金	60
売掛金	80	資本金	150
備　品	50	繰越利益剰余金	100
	400		400

繰越利益剰余金は、会社がもうけた利益の蓄積額であるから、次の関係が成り立つ。

期末繰越利益剰余金　－　期首繰越利益剰余金　＝　当期純損益

↓よって次の式が成り立つ

期末繰越利益剰余金　＝　期首繰越利益剰余金　＋　当期純損益

例題２

貸借対照表

実教商事（株　　02　年　3　月　31　日　　（単位：万円）

現　　金	170	買　掛　金	80
商　　品	100	借　入　金	60
売　掛　金	90	資　本　金	150
備　　品	50	繰越利益剰余金	120
	410		410

〈まとめ〉期首純資産と期末純資産の関係

期首の B/S

貸借対照表

□□商事　　01 年 4 月 1 日　（単位：円）

期首資本	資本金	××
	繰越利益剰余金	A

同額

期末の B/S

貸借対照表

□□商事　　02 年 3 月 31 日　（単位：円）

期末資本	資本金	××
	繰越利益剰余金	B

A　＋　当期純損益　＝　B

第４節　収益・費用と損益計算書（p.14）

1　収　益（p.14）

収益とは、営業活動によって　純資産を増加させる原因　　となることがらで
ある。

収益の種類

（　商品売買益　）、（　受取手数料　）、（　受取利息　）、
（　雑益　・　雑収入　）など。

収　益
○○　益
受取　○○

← p.14 解法のテクニック

2　費　用（p.15）

費用とは、営業活動によって　純資産を減少させる原因　　となることがら
である。

費用の種類

（　給　料　）、（　広告費　）、（　支払家賃　）、（　通信費　）
（　消耗品費　）、（　水道光熱費　）、（　保険料　）、
（　交通費　）、（　支払利息　）、（　雑費　）など

費　用
○○　費
○○　料
支払　○○

← p .15 解法のテクニック

3　損益計算書（P/L）（p.15）

収益　－　費用　＝　当期純損益　（＋のとき当期純利益、－のとき当期純損失）

↓変形する（当期純利益の場合）

費用　＋　当期純利益　＝　収益　←　損益計算書等式

損益計算書　・損益計算書等式にもとづいて　収益　と　費用　を　一覧表にしたものである。

・　一定期間　にどれだけの収益と費用があり、その結果として　経営成績　を示すものである。

・損益計算書の基本形

損益計算書

□□商事　○年○月○日から○年○月○日まで　（単位：円）

（　費　用　）	（　収　益　）
（　当期純利益　）	

例題１

損益計算書

実教商事（株）　01 年 4 月 1 日から 02 年 3 月 31 日まで　（単位：万円）

給　料	80	商品販売益	150
広　告　費	20	受取手数料	20
支 払 家 賃	30		
交　通　費	10		
雑　費	10		
当期純利益	**20**		
	170		170

例題２

損益計算書

市ヶ谷商事（株）　01 年 4 月 1 日から 02 年 3 月 31 日まで　（単位：万円）

給　　料	70	商品販売益	170
支払家賃	50	受取利息	10
水道光熱費	40	当期純損失	10
保険料	20		
雑　　費	10		
	190		190

例題３

	期首資本	期末			収益	費用	純損益
		資産	負債	資本			
(1)	60,000	ア 115,000	31,000	84,000	イ 91,000	67,000	ウ 24,000
(2)	エ 120,000	165,000	オ 53,000	112,000	98,000	カ 106,000	－ 8,000

【NOTE】

第５節　取引と勘定記入（p.18）

１　取　引（p.18）

簿記では　資産　・　負債　・　純資産　　に増減を生じさせることを　取引　という。

例題１

１．契約を結んだだけでは資産（商品）は増加しないので、
簿記上は取引とならない

２．資産（商品）が減少するので簿記上の取引となる。

３．資産（現金）が減少するので簿記上の取引となる。

２　勘　定（p.18）

（１）勘定と勘定科目

・記録・計算を行う単位を　勘定　　（ａ／ｃと略す）といい、すべての取引は勘定に記録される。

・勘定に付けられた名称を　勘定科目　　という。

（２）勘定口座

・帳簿に設けた勘定科目ごとの場所のこと。

・勘定口座の形式には　標準式　　と　残高式　　がある。学習上は標準式を簡略化した　Ｔ字形　　（Ｔフォーム）を用いることが多い。

（３）勘定の記入方法

・資産の勘定は増加を　借方　　、減少を　貸方　　に記入する。

・負債と純資産の勘定は増加を　貸方　　、減少を　借方　　に記入する。

・収益の勘定は発生を　貸方　　に記入する。

・費用の勘定は発生を　借方　　に記入する。

勘定へ記入するときのルール

資産の勘定

（　増加　）	（　減少　）

負債・資本の勘定

（　減少　）	（　増加　）

費用の勘定

（　発生　）

収益の勘定

	（　発生　）

※ 勘定へ記入するときのルールは、B/S、P/L との関係で覚える（p.20 側注参照）。

第６節　仕訳と転記（p.20）

簿記では取引を勘定に記入するさい、次の手順で行われる。

取　引 →（　仕訳　）→（　仕訳帳　）→（　転記　）→（　総勘定元帳　）
（略して　元帳　）

1　仕訳の意味（p.20）

・取引を勘定に記入するにあたり、

① どの勘定のどちら側（借方か貸方か）に

② いくらの金額を記入するか　　決めることを仕訳という。

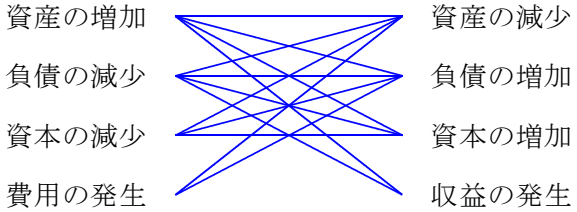
・仕訳は　取引要素の結合関係　　および　　貸借平均の原則　　に

もとづいて行う。

（１）取引要素の結合関係

すべての取引は次の図のような結合関係を持っている。

取引要素の結合関係



※ 線の引いていない取引は存在しない。

（２）貸借平均の原理

仕訳で借方に記入される金額の合計と　貸方　に記入される金額の合計は等しい。

これを　　貸借平均の原理　という。

２　仕　訳（p.21）

仕訳の手順

①「　何が　」「　いくら　」増えたり減ったりしたか考える

② それは　取引要素の増減または発生　　のどれにあたるのか考える

③ それは借方　　記入か、貸方　　記入か考える（P.20「勘定を記入するときのルール」参照）

④　仕訳　　として表示する

例題１

４月１日　実教太郎は現金￥*100*を出資し、実教商事株式会社を設立した。

※仕訳を行うときは、**会社にとって**何が増えたか、減ったかを考える。

〈仕訳の手順にそって考えてみよう〉

① 何が、いくら増減したか？　→　現金　　が￥*100*増加　　した。

② それは取引要素でいうとどれにあたるか？→　資産の増加

③ それは借方記入か貸方記入か？　→　借方　　に記入する

④ 仕訳として表示する　→　（　借方　）現金　*100*

↓続く

① 他にも何か増減したか？　→　資本金　　が　￥*100*増加　した。

② それは取引要素のどれにあたるか？　→　純資産の増加

③ それは借方記入か貸方記入か？　→　貸方　　に記入する

④ 仕訳として表示する　→　（　貸方　）資本金　*100*

↓以上を整理すると仕訳は次のようになる。

4/1　（借方）現金　*100*　（貸方）資本金　*100*

例題２

１．（借）　現　　金　　1,000　　（貸）　資　本　金　　1,000

※　会社　　にとって何が増えたか？

２．（借）　商　　品　　50　　（貸）　買　掛　金　　50

※「掛けとした」→ 買ったときなら「　買掛金　」、売ったときなら「　売掛金　」で処理する。

３．（借）　売 掛 金　　25　　（貸）　商　　品　　20

　　商品販売益　　5

※原価（¥20）と売価（¥25）の差額は　商品売買益　　（収益）

４．（借）　商　　品　　30　　（貸）　現　　金　　10

　　買　掛　金　　20

５．（借）　現　　金　　490　　（貸）　借　入　金　　500

　　支払利息　　10

※「利息を差し引かれ」→ 利息を　支払った　ということであるから、支払利息　　（費用）で処理する。

６．（借）　買 掛 金　　70　　（貸）　現　　金　　70

※「買掛金を支払った」→ 買掛金は「商品　　を　掛け　で買ったときの　債務　」

↓支払った

買掛金が　減少　　する。

７．（借）　現　　金　　25　　（貸）　売　掛　金　　25

※「売掛金を受け取った」→ 売掛金は「　商品　　を　掛け　で売ったときの　債権　」

↓受け取った

売掛金が　減少　　する。

８．（借）　支払家賃　　30　　（貸）　現　　金　　30

※「家賃を支払った」→ 支払家賃　　（費用）で処理する。

９．（借）　現　　金　　5　　（貸）　受取手数料　　5

※「手数料を受け取った」→　受取手数料　　（収益）で処理する。

3　転　記（p.25）

転　記　仕訳　を元帳の各　勘定口座　に書き移すことを転記という。

転記のルール

1．仕訳の　借方　の金額は、仕訳と同じ勘定口座の　借方　に記入する。

2．仕訳の　貸方　の金額は、仕訳と同じ勘定口座の　貸方　に記入する。

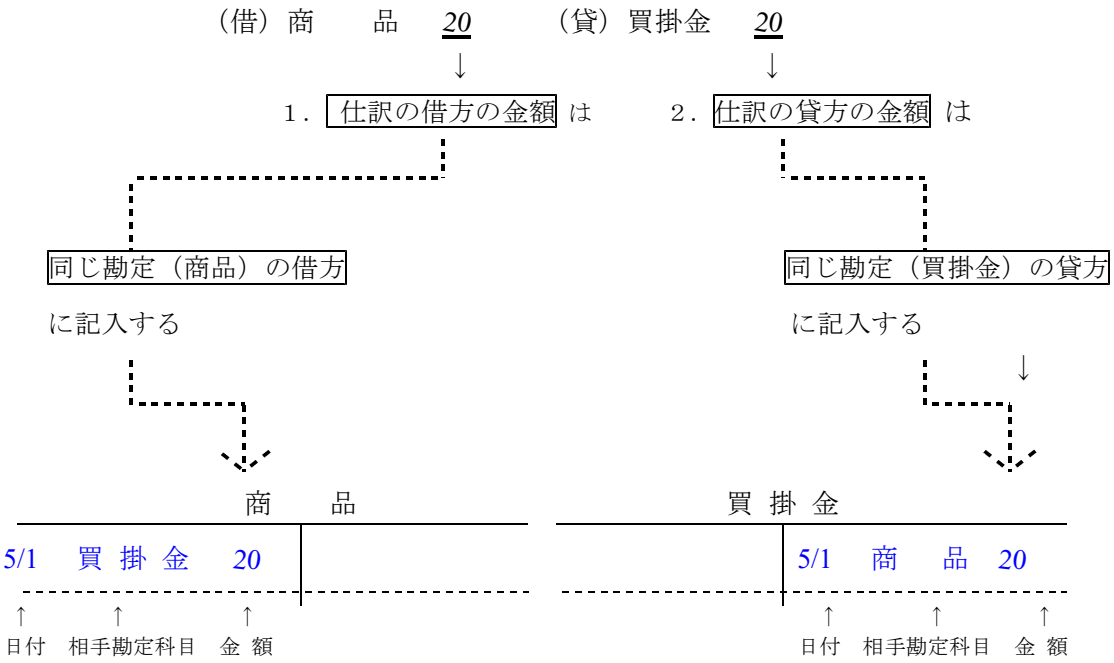
そのさい

①　日付

②　相手勘定科目（２つ以上あるときは　諸口　と記入）

③　金額　　を記入する。

〈例〉5 月 1 日



【NOTE】

例題３

4/18　（借）　現　　金　　500　　（貸）　借　入　金　　500

現　金		借　入　金	
4/18　借入金　500			4/18　現　金　500

例題４

5/ 1　（借）　現　　金　　130　　（貸）　商　　品　　100

　　商品販売益　　30

現　金		商　品	
5/1　諸　口　130			5/1　現　金　100

商品販売益	
	5/1　現　金　30

【NOTE】

4　仕訳帳と総勘定元帳（p.27）

（１）**仕訳帳**　　すべての取引　　を発生順に記入する帳簿を仕訳帳という。

（２）**総勘定元帳**　すべての勘定口座　　が設けられている帳簿を総勘定元帳（略して　元帳　）という。

仕訳帳と元帳はすべての取引が記録されるため、複式簿記にとって欠くことのできない大切な帳簿であり、　主要簿　ともいわれる。

例題５

仕　訳　帳　　1

01年		摘　　要	元丁	借　方	貸　方
4	20	（商　　品）　　諸　　口	5	*10,000*	
		（現　　金）	1		*3,000*
		（買 掛 金）			*7,000*

総勘定元帳（残高式）

現　　金　　1

01年		摘　要	仕丁	借　方	日付		摘　要	仕丁	貸　方
					4	20	商　品	1	*3,000*

商　　品　　5

01年		摘　要	仕丁	借　方	日付		摘　要	仕丁	貸　方
4	20	諸　口	1	*10,000*					

第７節　試 算 表（Ｔ／Ｂ）（p.30）

1　試算表とは（p.30）

・総勘定元帳に記入されている勘定科目とその金額を、１つの表にまとめたものである。

・試算表には　①　合計試算表　　②　残高試算表　　③　合計残高試算表

の３つの種類がある。

2　試算表の作成目的（p.31）

①　総勘定元帳の　　転記（または記入）が正確に行われている　　かどうか確かめる。

②　経営管理　　に役立つ情報を入手する。

例題１　p.32 **解き方参照**

合 計 試 算 表

〇年〇月〇日

借　方	元丁	勘定科目	貸　方
262	1	現　金	*153*
125	2	売　掛　金	*50*
200	3	商　品	*100*
20	4	買　掛　金	*120*
40	5	借　入　金	*40*
	6	資　本　金	*100*
	7	繰越利益剰余金	*72*
	8	商品販買益	*25*
13	9	支払利息	
660			*660*

p.33 **解き方参照**

残 高 試 算 表

〇年〇月〇日

借　　方	元丁	勘定科目	貸　　方
109	1	現　　金	
75	2	売　掛　金	
100	3	商　　品	
	4	買　掛　金	*100*
	6	資　本　金	*100*
	7	繰越利益剰余金	*72*
	8	商品販売益	*25*
13	9	支払利息	
297			*297*

p.33 **解き方参照**

合計残高試算表

〇年〇月〇日

借　　方		元丁	勘定科目	貸　　方	
残　　高	合　　計			合　　計	残　　高
109	*262*	1	現　　金	*153*	
75	*125*	2	売　掛　金	*50*	
100	*200*	3	商　　品	*100*	
	20	4	買　掛　金	*120*	*100*
	40	5	借　入　金	*40*	
		6	資　本　金	*100*	*100*
		7	繰越利益剰余金	*72*	*72*
		8	商品販売益	*25*	*25*
13	*13*	9	支払利息		
297	*660*			*660*	*297*